

人文会ニュース

1992.7

⑦マーク、もらえますか？

.....大盛堂書店 渡辺 晃 1

〔人文書講座26〕

共同体としてのヨーロッパ
——統合と差異のはざままで

.....三島憲一 8

新聞雑誌室から 都立日比谷図書館 石井敏子 24

中小書店がいかにして

“堅い” 本を売るか——「TS選書」3年間の試み

.....文化通信社 星野 渉 29

92年度委員会活動について..... 34

新版

自然界における 左と右

M.ガードナー ◆坪井、藤井、小島訳
鏡から宇宙の果てまで、「左と右」
の不思議な冒険。話題盛り沢山で
面白い、科学読物の傑作 ▶ 3500円

〈悪女〉論

田中貢子

人はなぜ〈悪女〉を作りたがるのか。
〈悪女〉について類型的イメージを
抱く現代人への挑戦状！ ▶ 1800円

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1
☎03(3439)0128(営業) 表示価格は税込み

ナチスに権利を 剥奪された人びと ヒトラー政権下の日常生活 II

新刊 / 3000円

H・フオッケ U・ライマー / 山本尤・伊藤
富男訳 本書がドイツで大きな反響を呼んだ
のは、市井の人々、政治的、社会的でない民
族的グループに降りかかった出来事を様々な
局面で描き、その抵抗と挫折を生々しい臨場
感と息づかいをもって活写しえたからである。

社会思想社

東京都文京区本郷3・Tel.03-3813-8101

◆仏教入門シリーズ

唯識入門

○高崎直道

唯識思想の歴史・人物・文献について解説し、
中辺分別論などを読みながら、心が作り出す
迷いと悟りの世界を解き明かす。19000円

空入門

○梶山雄一

「私には主張がない」など奇抜な論理を駆使
し、われわれの常識に挑戦する空の思想。そ
の真意義を明かす好著。19000円

▶ 定価は消費税込み

東京都千代田区
外神田2-18-6

春秋社

☎(03)3255-9611
振替東京8-24861

黒田 亘

行為と規範

行為をめぐる問題群を検討し、倫
理学の再建へ。2刷 / 2472円 + 260

日沖宗弘

プロ並みに撮る写真術

ひとりで仕事をする研究者・ライ
ターのために 4刷 / 2060円 + 260

E.ショーター / 池上・太田 訳 女の体の歴史

イヴ以来の重荷から解放されるま
での女の体のドラマ。3296円 + 310

W.H.ハートル / 秋元実治 訳 数詞と内部空間

ギョーム理論から ゼロ複数、S
単数を空間的に解く。2266円 + 260

* 定価は税込 / 振替東京5-175253

東京文京
後楽2-23

勁草書房

電話(03)
3814-6861

⑧ マーク、もらえますか？

大盛堂書店 渡辺 晃

「人文会」といわれても、日常業務の中で「会」を意識することが殆ど無い。せいぜい若干タイムラグのある

「人文会新刊月報」で会員社の出版物の入荷・在庫チェックを兼ねて一同に見る時位なものだ。全国チェーンの大型店と違ってせいぜい渋谷の区議会議員（よくて都議会議員か）どまりの店の一現場担当には「会」と組織的な接触を持つ機会もない、おかげで「会」の本当の怖さも知らない。もちろん会員社の営業マンからは有益な情報提供を受けたり折に触れての「飲ミユニケーショ

ン」もあったりで、それなりの友好関係は保っているのだが。

さて「会」からの注文は人文書を積極的に販売してきた経験を具体的に述べよ、とのこと。意図的に手抜きをしてきたつもりはない。かといって倦まずたゆまずインベーションを心掛けてきたとは口が裂けても言えない。要は「定番」と「新刊」のバランスを考え手堅く「専門書店」の看板を穢さない程度に遊びも入れて自然体でやってきた、という程度。しかしこれでは他人には何の

ことやわからない、このレポートも後が続かない。そこで「会」の二十周年記念『人文科学の現在』第二部の基本文献の常備率（この場合常備寄託契約品という意味だけでなく通常置いてある程度の意味）を手掛かりに専門書店の看板が泣くか泣かないか点検する方法を採ることにした。現時点ではこの「定番表」も品切れ・重版未定本が散見され、会ではその後の刊行分も含めた改訂版も検討中とか。

まず前提として当店は多層階売場構成であり、人文書の核は三階に法経書との同居という配置をとっている。人文書の中分類のうち「歴史」「教育」は六階に配置され、小分類でみると「言語学」「芸術思想」「発達心理・教育心理」が六階、「科学思想」が五階に各々主導権を委ねている。更にこの「定番表」は文庫・新書をも含んでいるが、岩波書店・有斐閣・新日本出版社の新書以外は四階の一般・文芸書フロアへの配置という構成をとっている。但し担当者の匙加減で文庫・新書等は結構「つまみ喰い」しているので要は客層に応じて柔軟にということになる。

このような条件の下で三階人文書コーナーに限定した「定番常備率」を算出してどれ程の意味があるのか？愚行を承知で多層階における棚作り（商品構成）の反省もこめて敢えてこの手法でアプローチを試みた。従って「店内」に「あることがわかっていても」「三階に通常置いていないものは「ないもの」としてカウントした。

まずは「哲学・思想」。総記的「哲学」は3750。中央公論『世界の名著』は当店のメイン帖合トールハンが全点常備をやめてしまってから補充が停滞し棚に欠番が目立つようになった。どこまで続く『人と思想』（清水書院）、学生さん、これだけでレポート・卒論を仕上げようってんじゃないでしょうね。大森荘蔵『時間と自我』（青土社）で健在ぶりを示す。『言語学』2151。大修館は六階に任せてあるからこの数字はしょうがないが、それにしても大修館の常備は「セット」だ「選択」だとよくトラブる。丸山圭三郎、カラオケの後は何が飛び出すか？（『東洋思想』2453。安岡正篤、「混沌の時代の安心立命哲学」と銘うって全点フェアをやったことがあるが成績はイマイチだった。棚の高率回転と平積み販売が正比例しないケースはままある。『井筒俊彦著作集』）どうして中公な

んでしょね」と複数の版元営業マンが言っていた。「西洋思想」2151。『叢書ヒストリー・オブ・アイデアズ』（平凡社）、ネタ本である『西洋思想大事典』の刊行に合わせ、全点フェアをやったけど肝心の大事典は売れたっけなあ？理想社のKさん、どうしているんだろう？手垢にまみれた理想社の一九八九年で止まったままの目録が年月の経過を感じさせる。理想社版と白水社版は「ニージェ全集」の東西の両横綱だった。白水社のOさん、新装版もいけど全集も頑張って維持してね、横綱不在は角界だけで結構。

〔現代思想への案内〕1017。竹田青嗣、以前筑摩書房の

YさんからTVの深夜番組で現代思想っぽい意外な掘り出し物がある、と教えられてそのうちと思っているうちに終わってしまった、残念。「実存主義」1331。創文社の『ハイデガー全集』の新作が今年に入って二点刊行されたが仕入れてなかった。お客さんに「出てるはずだけど」ときかれてわかった次第。この辺のガチガチの専門書になると鈴木書店と取り引きのない当店は苦しい。神田村の日新堂も頑張ってくれてはいるのだが、メインは法経専門だ。担当者の怠慢を取次のせいにするのは潔くないけれど。「マルクス主義」2550。東欧共産党政権のドミノ倒しの時期に怒濤のように押し寄せた安直な「共産主義

室町戦国の社会

永原慶二著 障子・畳の住居、能・茶・花道などの文化が生れ、民衆が歴史の舞台で躍動し始めた中世社会の実像を描く。四六判／定価一九八〇円

奥州藤原氏と柳之御所跡

平泉文化研究会編 秀衡の館跡の可能性が強調、話題となっている柳之御所跡の発掘成果を検討、中世都市平泉を見直す。四六判／定価一九八〇円

暮らした中の古文書

浅井潤子編 江戸後期を対象に、出生・学問・奉公・成人・結婚などの古文書を写真で紹介、社会の仕組みと人々の姿を描き出す。四六判／定価一九八〇円

明治維新と天皇制

田中 彰著 明治維新の意義を問い、現代の視点から近代天皇制を考える。高杉晋作、坂本龍馬ら先駆者達の実像にも迫る。四六判／定価二〇〇〇円

中世を考えるシリーズ

刊行開始
各四六判

中世を 家族と女性

峰岸純夫編
二二〇〇円

考える 王家・武家・庶民など諸階層の女性、女性のライフサイクルなど中世の様々な家族と女性の姿を描く。

中世を 法と訴訟

笠松宏至編
二〇〇〇円

「御成敗式目」に代表される中世の法世界。現代の感覚では理解しにくいその法体系を鋭く抉り出す。

吉川弘文館

〒113・東京都文京区本郷 7-2-8
電話03-3813-9151／定価は税込

崩壊物」の洪水の中、廣松渉『今こそマルクスを読み返す』（講談社現代新書）『マルクスと歴史の現実』（平凡社）の健闘は「けなげな」観すらあった。合同出版さん、『ドイツ・イデオロギー』や『ネオ・マルクシズム』だけで飯が食える御時世でないのはよくわかります、環境問題も大事ですがこの分野から全面撤退だけはしないです、皆さんがんばってるんですから。〔現象学〕2742。現象学と聞くとフッサールやメルローポンティよりも先に連想ゲームよろしく世界書院を思い浮かべてしまう。

普段は新刊程度しか店頭には置いてないのだが、何故か気になる存在といったところだ。何と言っても思い出した様に舞い込んでくる新刊案内の「犯罪の匂い」すら感じられる独特の字体。気になる存在になるままに放置しておいたのでは精神衛生上良くない、と或る日突然思いついた。すぐに「チョッとアブない出版社・世界書院フェア」と称して三十点位平積みした。たいして売れなかったが妙な安心感が後に残った。〔分析哲学・論理実証主義〕1931。『ホワイットヘッド著作集』以前は常備していたがスペースをとる割には売れないので何年か前をやめてしまった。ところで松籟社、「籟」という字の意味

を知らなくて社名の由来に何か奥深いものがあるような気がして漢和辞典を引いてみた。「松」とある。「松籟」を引いたら「まつかぜ」とあった。肩すかしをくわされたような気がした。（フランクフルト学派）2043。『ペンヤミン著作集』は四階の晶文社コーナーに置いてある。もちろん単発物は三階の人文コーナーにもあるのだけれど全集・著作集を収納するだけのスペースがない。アドルノの音楽批評物も六階の音楽書コーナーに任せてある、スペースがないのが辛いところだ。

〔芸術思想〕456。この辺になると収納スペースと多層階構成という問題より人文担当者のセンスが問われる比重が高い、正に「棚の芸風」が端的に表れるのではなからうか。それにしても七%というのはチト淋しい。「芸風」が確立された棚は担当者が交替する時に「伝承の儀式」があってもおかしくない。引き継ぎを受けた担当者力量と才覚が備わっていれば「〇〇代目襲名披露興行（フェア）」だって出きそうなものだ。

〔政治思想〕2136。満を持して筑摩書房から丸山真男の新刊が出るという。営業のYさんから企画段階の頃だから相当前にこの話は聞かされていた。親近感を持つ意地

の悪い書店員からは「例のあれ、もうやめちゃったの?」と冷やかされたことも一度や二度じゃないだろう。それにしてもYさん良かったね、しっかり販売するからね。

〔科学思想〕1863。村上陽一郎・ローレンツ・養老孟司クラスの売れっ子はかつては三階人文書の科学思想コーナーで活躍してもらった実績がある。『手狭』を口実に五階自然科学に一本化して長い。ところが『唯脳論』（青土社）のビックヒット以降協力的な新刊が相次いだので背に腹は変えられず三階に養老孟司コーナーを復活させた。現金なものが現金商売だから「ええじゃないか」といったところ。M・ボラニー、キャッチフレーズの「暗黙知」が気に入った。暗く黙って何でも知っている（本当はそんな低次元な意味じゃないだろうが）、出版点数は少ないがミニフェアでいこう。「暗黙知の哲学・マイケル・ボラニーの世界」——フェア終了後に版元さんにも結果報告書を送ったところハーベスト社から丁寧な礼状が届いた。地方小扱いなのでいきなり沢山の仕入れは出来ないが最近では社会学関係の手堅いヒットも飛ばしているハーベスト社さん、書店員はしっかり收穫の手応えを感じていますよ。

〔記号論・意味論・解釈学〕2151。『バフチン著作集』（同時代社）、せりか書房の名著『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』『ミハイール・バフチンの世界』プラス『現代思想・バフチン特集』（青土社）で抱き合わせのフェアをやったことがある。連邦の解体が文学、芸術の領域に今後どんな影響を及ぼし邦訳シーンにどんな展開となって現れるか注目されるどころだ。〔構造主義〕2836。（ポスト構造主義）3960。ボードリヤールの隣に佐伯啓思の著作を並べている、これは間違った（或いは恥ずかしい）配列なのだろうか?（日本の現代思想）2630。中沢新一コーナーの前で学生風のお客さんからきかれた。『チベットのモーツァルト』の単行本ありませんか?」棚にはちゃんと入っている、学生（だけではないが）から単行本ときかれたら文庫だと思えというのが業界のジョーシキ。文庫化される筈はないと思ったが100%の自信はない。昨今は「筈がない」と思えるようなものまでいとも簡単に文庫化されてしまうから油断も隙もあったものではない。断りもなくとはいいたくもなるが、文庫の新刊情報に目くばせしていれば足りることだから毒蛇になるので深追いはしない

い。失礼かなとは思ったが念のためと思ってせりか書房に電話してみた。「間違ってもそういうことはしません」という返事がかえってきた。文庫化すること、あるいは文庫発行社に版權を譲渡すること一般を悪事と決めつけるつもりはない。安易な文庫化に抵抗を感じるだけだ。そんなこともあったから「せりかの回答」には「いてもいいだろこんな奴」風の氣概が感じられて嬉しかった。余談ながらせりか書房で電話に出られる機会の多い女性の応対に口先だけの営業用社交辞令と対極にある誠実さを感じられ好ましい。名前も顔も存じあげませんががんばって下さい。

以上「哲学・思想」の総合得点は七五二分の三七四で四九・七％と出た。

次は「心理」——「心理学一般」1725。何といってもこのところでは誠信書房に中辞典の改訂でお茶を濁すことなく決定版大辞典を出して欲しい。「基礎心理」1748。この分野でスッポリ抜けているのが「脳関係」、これも科学思想のところで触れたのと同じで手狭を口実に五階の生物・医学の方に統合してしまった結果三階には一部を除いてほとんどない。しかしよくよく考えてみれば「脳」

を抜きに「心」を論じることには無理がある。その意味では分類上の便宜とはいえず手荒すぎたという反省もある。何点かは復活させようと思った。当店ではフェアやコーナー作りは余程多額の仕入れを伴わない限り担当者の裁量に任されている。面倒な企画会議もないかわり、特別の予算もパブリシティの手段もない。ないない尽くしの原始的家内制手工業的フェアで頼りにするのは「口コミ」と版元さんの協力。「色彩心理・知覚心理フェア——イメージを心理する」と銘うってやった時に誠信書房から「騙し絵風」の図版をバラ売り出来ない形態であるにも拘らずポスター替わりにと提供していただいた。ビジネス書や一般書・実用書ではポスター付・帯付・POP付という至れり尽くせりのセット企画が当たり前、そのかわり担当者は版元との義理やスペースの確保で大変だなと思う。「発達心理・教育心理」446。『狼に育てられた子』（福村出版）や『身体・自我・社会』（ミネルヴァ書房）『魂の殺人』（新曜社）等が臨床心理中心の三階でもきかれる確立が高い。置けば売れるのはわかっているが割り切って教育書コーナーに任せている。ただ発達心理に関しては青年心理の扱いが曖昧で単純に青

年・大学までは六階へどうぞという訳にはいかないので中途半端な品揃えになっている。〔臨床心理〕44・47。催眠関係の本は既刊・新刊を問わずよく売れる。ただ催眠・睡眠とタイトルにつくものをなんでもかき集めればいいかというと、かなりいいかわしいものもあって棚の「品位」を落としかねない。先日某版元の営業マンが既刊本の廉価版を出すというので見本を持ってきた。二百円程度の差で作りも大して違わないので前の版はどのような扱いにするのか、ときいても要領を得ない。よく見ると当人が催眠状態のように虚ろな目をしていた。〔精神分析・精神医学〕91・121。岸田秀コレクシヨンの第一回が青土社から五点同時発売になった。コレクシヨンのいうから既刊本のイメージを一新する洒落た装幀を予想（期

待）していた。結果は「ものぐさシリーズ」の装幀に統一、ものぐさを逆手にとった訳じゃないでしょうね、Sさん。〔社会心理〕28・35。〔その他の心理〕20・29。

以上「心理」の総合得点は三五一・二分二二で六二・九％。

さて次は「宗教」といきたいところだが、既に枚数オーバー。このまま突っ走る訳にもいかない、潔く中途にて打ち切り。

ホテルや旅館のフロントにはたいがい「日観連加盟」の類の看板がベタベタ貼ってある。本屋の入口にも「人文会特約店」「工学書協会特約店」といった看板がかかっていたらオモシロイ。こんな程度の人文書コーナーでも㊦マークはもらえるんでしょうか？ 人文会様。

共同体としてのヨーロッパ

——統合と差異のはざままで

三島 憲一

一九九三年一月一日をもってECの市場統合がなされ、一九五七年の発足以来、少しずつ歩んできた道がひとつの頂点に達する。資本、商品、人の移動に制限をいっさいかけないことを原則とするヨーロッパの誕生である。国境の通関手続きがほぼ解消されるほか、イタリア人の医者ドイツで開業しようと、ドイツ人の弁護士がスペインに事務所を置こうと、いっさい構わなくなる。

戦争と破壊、大量殺人と国境の変更といった悲劇に見舞われた今世紀前半の歴史への反省から生まれた、融和と統合の壮大な実験である。昨冬のマーストリヒト条

約にしたがえば、いずれは通貨統合を実現し、その先は緩やかたちでの政治統合を目標とすることになる。また、周辺国、特にオーストリアやEFTA諸国の加入もそう遠い将来のことではないであろう。

もちろん、この統合がうまく行くかどうかには色々と疑義もある。特に通貨統合に関しては、政治統合なしに可能なのか、通貨同盟に参加する条件（一定のインフレ率や国債発行額の上限）を例えばドイツはこのままでは守れないが、ドイツ・マルクなしでの統合など想像できるのか、南ヨーロッパの豊かでない国家群への援助負担

に果たして耐えられるのか、そしてなによりも三億人の市場を抱えた巨大な組織を監視し、各国の複雑な意思を調整するという錯綜した意思決定が有効に機能するであろうか。ブリュッセルによる中央集権どころか、多くの国では、国内の中央集権制も認めない雰囲気強いところで、民主主義と資本主義の相互矛盾がどのようにすり合わされていくのか、すでにデンマークの国民投票では「否」が出ている……。問題は多い。しかし、また政治的及び社会的な想像力とヴィジョンの大きさは、そして民主的意決定への意思は我が国が失って久しいものでもある。じっくり観察して行きたい。だが、ここではそうした問題よりも——それらと絡んではいるが——いわゆるEC地域を越えて、むしろ文化面において共同体としてのヨーロッパを考えてみたい。

ヨーロッパは実に多様な部分からなる文化共同体である。どんなヨーロッパ人でもヨーロッパの多面性をことごとく知っていると自称することはできない。ましてや外部の我々にはとても不可能である。ドイツ一国をとっても、北ドイツの静かで落ち着いた勤勉な生活態度に較

べてバイエルン地方の陽性でノンシャランな人間関係の違い。イタリアでも北イタリアと、例えばシチリアのよいうな南イタリアのあいだにある風土、文化、人間の、そしてなによりも生活水準の大きな違い。それらは誰の目にも明らかである。にもかかわらず、他国と較べるならば、それぞれまごうかたなくドイツ人の生活であり、またイタリア人の生活である。こうして内部に大きな差異を宿した（ときには言語の相違をも宿している）国民がまたそれぞれの差異を自覚しながらヨーロッパという大きな全体を作っている。北の果てのノルウェーの海岸の森とエーゲ海の陽光に光る石灰岩の山、北ドイツや北フランスのどこまでも平らな農村地帯とアルプスの谷間にたたずむスイスやオーストリアの村々、中近東への出口でもあるウイーンと大西洋に接するリスボン、それぞれの極の幅は大きい。ドイツのプロテスタントの技術者とスペインのカトリックの農民のあいだでは、また植民地帰りのポルトガルの軍人とオックスフォードの教授とのあいだでは、世界がまったく異なるであろう——どの国でも社会階層の相違は世界の相違であるが、それ以上の距離があらう。

また、現在の政治体制を見ても、大きな相違がある。連邦制をとり、教育や大学行政、そして一部の経済政策に關しても州の自立性の強いドイツに較べてフランスは、日本並みかそれ以上の中央集権制である。フランスがヨーロッパ統合にあまり賛成でないのは、統合すればどうしても国より下のレベルの各地域の力が強くなり、パリから全国を管理する中央集権制以外の統治形態を想像できないフランス人にとっては「フランスの魂を売り渡す」ことになると思えるようである。それに対してドイツでは例えば連邦航空局はブラウンシュヴァイクに、連邦カルテル庁はベルリンにという風に、中央官庁でも地方に分散している。さらにはスペイン、イギリス、オランダなどは立憲君主制であるのに、他の国では一八世紀に王様の首を切つて以来、そうした国民統合の權威などは必要としなくなっている。人口が五千万、六千万の大きな国もあれば、ベネルックス諸国のように小さな国もある。イギリスやスペインのように国内の分離運動（北アイルランド、バスク）に悩む国もあれば、分離の話しが冗談以上ではない（例えばドイツのバイエルン）国もあるし、なんとか中間的妥協で一応しのいでいる（例

えば北イタリアの南チロル地方のドイツ系住民とローマの中央政府との關係）国もある。

またそうした個々の境界地域には多くの場合不幸な歴史の痕跡が残っている。アルザス・ロートリンゲンやスペインのカタロニア地方は言うに及ばないし、オーストリア・ナイセ以東のポーランドには最近の過去の傷がいやしがたく残っている。北アイルランドの問題は今でも解決が見えない。イギリスがアイルランドによりやく自治権を認めたのが一九世紀後半であったことを考えれば、文化的共同体としての多様性を自慢する現在のヨーロッパ人も、その裏で多くの血が流されてきたことも忘れるわけにはいかないはずである。南ドイツの有名な大学町フライブルク周辺が一九世紀前半までオーストリア領だったこと、スイスのヌシャテル近郊はプロシャの飛び地であったこと、ナポリから南のイタリアも長期間スペインの支配下にあったことなどは、今ではだいたい忘れられているがやはり痕跡は残っている。

こうした多様で多彩なひとつの小宇宙のありようはさまざまに表現されている。ドイツの南欧文学者で、『ヨーロッパ文学とラテン的中世』の名著で知られるクルチュ

スは、ヨーロッパをひとつのオーケストラに喩えている。各国民がそれぞれ得意のパートを受け持ち、全体として絶妙なハーモニーを生みだしているというのだ。たしかに、イギリスの民主主義、フランスの宮廷生活と趣味、ドイツの大学と観念論哲学、セルヴァンテスやエルグレコやゴヤのスペインの憂愁、ルネサンスのイタリア芸術の光輝……といった具合に並べて見れば、そのとおりであろう。あるいは、有機体のイメージで捉えるゲーテのような例もある。ヨーロッパとは、各部分相互の複雑な絡み合いのなかからたえず新たなものを生み出す生きた生命体であると言うのだ。「何千年も前に発し、成長し、拡大し、押しとどめられたり、押さえこまれたりしつつも、また息を吹き返し、活力を得て、いつになっても無限に新たな活動をしつつ立ち現われる、「ヨーロッパという」このいとも貴重な文化を見ていると、彼(教養小説『ヴィルヘルム・マイスター』の主人公ヴィルヘルム)には、人類が今後どこまで伸びるかにについて、今までとはまったく違った想念を得ることができた。彼は、このとても見通しがつかないほどの素晴らしさを持った文化に自分も参加し、そこで生き生きと働く人々

のなかに立ち交って、我を忘れて協力しようと思った」。その他にもヨーロッパ中世以来のキリスト教世界の伝統を輝かしい光のうちに描こうとしたドイツ・ロマン派の天折の天才ノヴァーリス、また二〇世紀にあつてアメリカから父祖の国イギリスに戻るといふ伝統回帰を果たしたT・S・エリオットなどなど、ヨーロッパの美と精神性を、高貴さと深さを、多様性とその魅力を説いた文章は尽きることがない。

だが、そうした美しく幸福なヨーロッパの賛美の文章には、たえずヨーロッパの外延を規定する意識がある。どこまでがヨーロッパで、どこからが非ヨーロッパなのか。元々はギリシア神話で乙女エウローペに恋したゼウスが牛に化けて彼女をさらひ、走り回った地域ということになっているが、歴史的にはまずは古代ギリシア時代、ペルシャ戦争に象徴されるアジアとの区別が重要である。ギリシア人たちはアジア的野蛮なるものから理性の国ギリシアを区別したというのである。現在のトルコ領である小アジアはギリシアの植民地でもあったし、また初期キリスト教も広く行われていたこともあって、歴史的にはヨーロッパに属するかもしれない。しかし、こ

れは中世末期以降のオスマン・トルコの進出と共にやはりヨーロッパ以外の地域になってしまったようだ。トルコがEC加盟の申請をしているが、審議がなかなか始まらないのは、トルコの経済力の低さだけが理由なのか。本当のところはわからないが、こうした疑問も出てきてしまう。回教世界と言えば、スペインを経てフランスに侵入した回教軍を撃退した七三二年のトゥールポワティエの戦いは、自由なる西欧キリスト教世界を守ったものとして教えつづけられている。あたかもアラブ世界にはいっさいの自由がなかったかのように。実際には中世ヨーロッパの学問は回教世界から伝えられた部分が多いのに、この世界からの区別の意識は現在も根強い。一六世紀のオスマン・トルコによるウィーン攻囲もこうした西欧の防衛という伝説的アイデンティティに力を貸している。実際には、これを機にコーヒーが西欧世界に入ってきたと言われているのだが。また中世末期のジンギスカンの軍隊の侵攻（一二四一年ワールシュタットの戦い）は恐ろしい記憶として残っている。モンゴルという言葉は野蛮、殺戮、非文明的な暴力的流浪のイメージと結びついている。ナチス・ドイツの敗色が濃厚な頃、ド

イツ国民の戦意高揚のための演説に使われた比喩は、このまま赤軍の侵入を許せば、単にドイツがボルシェヴィズム化するだけでなく、モンゴルの略奪、暴行、強姦を受けることになるというものであった。たしかに戦争における非戦闘員と戦闘員、捕虜の取り扱いなどの国際法上の規定を作ったのは、西欧だが、それを植民地において破ったのも西欧であり、西欧内部ではなによりもナチスがそれを無視していた。

ヨーロッパがなにによって他者と自己を区別したか、そしてその区別の仕方には多少とも身勝手なところがあることは多少とも感じ取れたかと思うが、逆に外部世界への西欧の侵入は、西欧の拡大（expansion of Europe）として定義され、多くの場合は文明の輸出、真理であるキリスト教の輸出として理解されてきた。新大陸でのアングロサクソンの植民、南米でのスペインやポルトガルの大帝国の建設、そして世界中における大英帝国の進出、アフリカへのフランスの軍隊と文明の輸出、これらは西欧の視野の拡大であり、結果として特に第二次大戦後の国際情勢下では北アメリカは事実上ヨーロッパと運命共同体となった。進出した地域の文化を事実上抹殺し

服従しながらの批判といった複雑性をもっていることも充分にうかがえる。カントやヘーゲルの理想主義にも、いやベートーベンの音楽にすらそういった複雑性が宿っていることはよく言われている。

こういった問題性をよく見ていたのが、一九世紀のドイツの哲学者ニーチェである。ドイツにしてもフランスにしてもそれぞれの国が自分たちの伝統と文化なるものを押し立てて、他国よりいかに優れているかを外にも内にも宣伝していた時代である。だが、そういう偽りの正当性、つまり「伝統の捏造」の虚妄性を見破り、ヨーロッパの良さがそれとは異なった深い精神性にあることを、ニーチェは強調している。彼はそういった精神の人々の一員であることを自負しながら「良きヨーロッパ人」という表現を生み出した。今までのヨーロッパを踏まえながら、ヨーロッパを越えるような人々のことである。

ニーチェの言い方は皮肉である。この「良きヨーロッパ人」はナショナリズムに陥るには「あまりに意地が悪く、あまりに甘やかされており、あまりによく知っており、あまりによく〈旅をしている〉」。ヨーロッパの小国

乱立とそれによる視野狭窄にはあきあきしている。「我々故郷なきもの、我々は種族から言っても、生いたちから言っても、あまりに多様であり、混合しており、ヘモダンの人間であり、それゆえ、ドイツでドイツの心性の涵養のためとして誇示されているあの欺瞞的な自人種崇拜や猥褻行為に参加するわけにはいかないのだ」(『喜ばしき知恵』三七七番)。こうした「ナショナリズムの狂喜がヨーロッパの諸国民のあいだを割いている病的な疎隔現象」は所詮は短期的なものであり、「ヨーロッパはひとつになろうとする明白な徴候」がある、と彼は論じる(『善意の彼岸』二五六番)。だが、それは政治的もしくは経済的統合といった意味ではなく、ギリシアとキリスト教によってできあがった生活形式がその頂点に、爛熟に達するということである。ニーチェは彼がプラトニズムと呼ぶギリシア精神、そして弱き者の同情道徳と呼ぶキリスト教が嫌いだっただが、そこで培われた精神性のみが、ヨーロッパを多様に豊かにしたことは認めていた。「ヨーロッパ精神のこの何千年にもわたる豊かな遺産の継承者である我々良きヨーロッパ人は、キリスト教のなかで育ち、そこから離脱し、キリスト教に好意をもたな

い。それは逆説的にも、我々の祖先が一切の留保なきキリスト教的誠実さを実践していたからであると彼は論じる。過去の知的緊張があつてこそ、その緊張から解放される自由なヨーロッパ精神が生まれるというのである。

「何千年にもわたるキリスト教的圧迫に対する闘い……こそは、この地上にかつてなかった精神の華麗な緊張をヨーロッパにもたらした」。他方で、キリスト教とプラトニズムの爛熟した落とし子である世紀末の芸術的デカダンスの感性も「良きヨーロッパ人」の文脈に含まれている。「我々明後日のヨーロッパ人、二〇世紀の第一世代である我々、その一切の危険な好奇心、多様性、仮装の術、精神と感覚における爛熟していわば甘くなりすぎた残酷さを持った我々。我々は……おそらくは我々のもっとも秘密の、最も心奥にある欲求、我々の最も熱い欲望と合うような美德を持つことであろう」(『善悪の彼岸』二二四番)。そしてニーチェは、こうした美德が祖先の禁欲道徳に発しながらも、まさにそれゆえにそれとまったく違ったものとなることをつけ加える。その点では、一九世紀のヨーロッパ的ロマン主義、リヒャルト・ヴァーグナーに象徴されるロマン主義も、またボードレールの詩も、

彼らすべてがもつ「表現のファナティカー」としての共通性こそ「良きヨーロッパ人」の条件なのである。「彼らは彼らの欲求の高みにおいても低みにおいても近い、基本的に近い。それこそはヨーロッパである。ただひとつのヨーロッパ。その魂が多様で激しい芸術によって突き上げられ、上へ、そして自己を越えていこうとするひとつのヨーロッパなのだ。どこへ？ 新しい光を求めてか？ 新しい太陽を求めてか？」(『善悪の彼岸』二五六番)。

こうした考え方をする以上、ユダヤ人もしくはユダヤ精神もヨーロッパの重要な構成要素であり、だからこそ当時広がつていた反ユダヤ主義に断固反対する。ある所では、ナシヨナリズムが特定の階級の利害に適つたものであることを看破できるならば、「なんのためらいもなく自分を良きヨーロッパ人と称し、諸国民の融合のために行動によって尽くすべきである」と述べたのちに、国民国家があるかぎり差別されるユダヤ人にヨーロッパがいかに多くのものを負っているかを自覚すべきであると述べている。「最も高貴な人間(キリスト)と最も純粋な賢者(スピノザ)、最も力強い書物と最も影響力のある道

徳法則」を彼らは生んだのであり、またヨーロッパ中世がアジア的迷妄の闇に閉ざされていたときに啓蒙と精神の自由を旗印にしていたのはユダヤ人の学者である。ユダヤ人のおかげでヨーロッパの課題はギリシアの継承となったのである、と逆説的ながらユダヤ人を擁護している。そうした多様性と精神の緊張のなから、また爛熟と頹廢のなから、新しい自由で、軽やかな文化が出てくることをニーチェは、「良きヨーロッパ人」として望んでいた。

ニーチェの議論は鬼面人を驚かすところがあるが、我々としては、ギリシア精神とキリスト教がヨーロッパの暴力の源であったことを認めつつも、またそうした暴力を正義とするような支配に抵抗する思想や芸術や文学が生まれたのも、ギリシア精神とキリスト教の伝統に由来することを忘れるわけにはいかない。例えば、数かぎりない、血で血を洗うような宗教的抗争のなかで、一五五五年のアウグスブルクの宗教和議、またイギリスの一七世紀（清教徒革命、名誉革命など）を経て「宗教的寛容」の精神が生まれたのもヨーロッパである。そのあた

りはロックの『寛容論』（一六八九年）が示唆的である。彼は、「魂の救済」こそが清教徒の目的である。したがって、本人自身がこの信仰を、この神を、聖書のこの読み方を正しいと思い、その信仰に入らないかぎり、「魂の救済」はあり得ない。つまり、外部からの強制によって信仰を押しつけたところで、その人の魂は救済されない。あくまでその人の「良心」によるものでなければならぬ。それゆえ、宗教戦争は信仰のために、魂の救済のためには、なんの利益ももたらさない。本人たちが自分で考え、判断して「魂の救済」を考えるようにするために、は、なんの押しつけもしないこと、つまり、「寛容」こそが重要である、と論じる。こうした彼の思想は、民主権や三権分立、代議制民主主義の考えとともにアメリカ独立宣言の基盤ともなり、他方では、フランスではもっと先鋭化されて、国家と教会の完全な分離をもたらした。そうして見ると、信仰の自由という、基本的人權の一項ひとつをとっても、排他的な宗教生活を営むがゆえの逆説としてヨーロッパが生みだしたし、そのようなヨーロッパでなければ生まれなかったであろうことがわかる。仏教、神道、さらに儒教や道教的要素が混在して

いる日本でも、また別の意味で宗教的には事実上寛容であった中国においても、生まれる必要のなかった普遍的な力をもった思想である。

しかも、現在では、この寛容の思想は、因襲やしきたりを破った自由で多様な生活スタイルの共生という考えにまで拡大されている。ところが、事実において宗教的寛容を実践していた東アジア文化圏では、逆に日常の儀礼や習慣（例えば親戚共同体の儀礼、年中行事、長幼の序列、男尊女卑）は、それを破ると大変なことになる非寛容な面があり、しかも、それは「魂の救済」といった本義に戻ることによって克服できるようなものではない。この辺に暴力や支配と癒着しながら、ヨーロッパの思想や芸術が、逆にある普遍的な価値を生み出したことの意義がある。ヨーロッパ人が決して得意になることのできない現実を通じて、しかし、世界の文化に貢献できる成果が出てきたわけである。現実には抗するなからヨーロッパの知性はその最も優れた文化を生んできたわけである。クルチウスが、理想としてのヨーロッパが現実のヨーロッパに抗して優れた文化のハーモニーを生み出したという意味でオーケストラの比喩を使うのなら

ば、まさにそのとおりであろう。人権の思想、個性重視の人生態度、芸術と倫理の切り離し、その他こうした普遍的な力を持つ価値はたしかにヨーロッパの所産である。

ところが、そのヨーロッパが目下のところ直面している最も大きな文化上の問題が、こうした普遍的な価値の持つ統合の力が、ひょっとして個々の地域の文化や伝統の消滅をもたらし、差異の喜びを打ち消す方向に作用しはしまいか、というところにあるのだから、話しはなおさら逆説的になり、また混乱する。

ようするにこういうことである。基本的人権といい、法秩序の支配といい、そうした価値から生み出された福祉政策や社会政策といい、それらは経済のもつ国際性と結び付いて、国家の管理能力を強め、結果としてどこでも同じ生活、どこでも同じ人間関係、どこでも同じビジネスライクで割り切った物の見方をもたらすことにならないだろうか、という疑念が生じている。文化の特質である他文化との差異が薄らぎ、オーケストラのパートの楽器による区別が失われてしまうならば、最早チェロと

バイオリンの、木管と金管の区別は消失し、ハーモニは生みだされない。そして伝統は、民族衣装や伝統芸能以上のものを意味しないフォークロアに過ぎなくなり、それぞれの文化の差異の楽しみ、よそと違うという個の主張は無意味になってしまふ。またヨーロッパは、特にドイツ、フランスなどの大国のヨーロッパに過ぎなくなる。それらの大国こそは、伝統を離脱する力と近代化の度合いが比例することを示しているではないか。南イタリア、特にシチリアのように近代化の遅れたところでは、伝統が生きているかもしれないが、逆に基本的人権すら、あるいは男女平等の初歩すら守られているとはいえない絶対的父権制が支配している。だが、またそうしたシチリア風の伝統に、シチリア風の生活の仕方にある捨て難い魅力と文化の自己主張があることもたしかである。

近代化の時間的序列から見ても、およそまったく違う時代に属する要素が同時に存在していることを、二〇年代ドイツの文明理論家のクラカウアーは「非同時的なものとの同時性」と名づけた。エルンスト・ブロッホなどもニュアンスを変えて多用している。高層ビルの横に葉ぶ

き農家があるとしたら、また役所ではリベラルで優秀な官僚が家では伝統的な家族観につきり、三世代同居を強要しているとしたら、そういう都市のうちに、そしてそういう人間のうちには「非同時的なものの同時性」がある。もちろん、厳密には、どんな人間にも、どんな都市にも、どんな近代化の結果にもかならず潜んでいるものだが、それがその文化や都市や人間のきわだった特徴である場合がある。豊かで近代的な北部と後進的な南部を持つイタリアなどはまさにそれであるし、ヨーロッパをその中心部と周辺部の差異において捉えるならば、現代ヨーロッパほど「非同時的なものの同時性」に貫かれているところはない、と言つていい。最初に述べたように植民地帰りのポルトガルの軍人と、オックスフォードの教授は、そしてベルリンやパリの華やかな大都会とハンガリーの農村はともにヨーロッパに含まれている。

各地域の文化的アイデンティティの依拠する差異が多くの場合、こうした「非同時的なものの同時性」に由来していることはたしかである。一方では近代化による画一化、普遍的な価値による統合、他方では時間的なずれによる個別化と差異化——この両者をどのように兼ねあ

わせていくかは、容易なことではない。だが、両者は緊張と対立のうちにあるだけではない。相互補完的で協力的な場合もありうるのではなからうか。だからこそすれっきからの都会人が田舎の素朴な生活からなにかを学ぶ場合があるのではなからうか。

ここで思いだされるのは、ドイツの作家で批評家のハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーが、まだベルリンの壁が開く二年前の一九八七年に出した『ああ、ヨーロッパ!』(邦訳タイトルは『ヨーロッパ半島』)という題の旅行記である。この多才で、ときどき拙ない、あまりにも幼稚な思考で問題を起こす作家が、本書では実に見事にヨーロッパの周辺部を描きだしている。「スウェーデンの秋」「イタリアの度はずれ」「ハンガリアの縫い合い」「ポルトガルの物思い」「ノルウェーのアナクロニズム」「ポーランドの偶然」「スペインのかげら」といった各章のタイトルの国名から明らかなように、ヨーロッパ中央部のドイツやフランスやベネルックス諸国といったわばリーディング・カントリーではなく、何年かにわたってこれら周辺部の国々を訪れた印象によるエッセイである。そのときに見聞した風物、さまざまな階層の人々と

交わした会話、社会的背景や歴史が巧みに織り合わされ、結果として周辺と差異の魅力が、ヨーロッパの生みだした普遍的価値とどのように共存しているか、また時には相反せざるをえないかが、淡々と暗示されている。

ノルウェーのフィヨルドの崖の上の農家にも吹き荒れる時代の風の力が描かれるかと思うと、怪しい医療で庶民の聖者と崇められていた医者像を拝むポルトガルの民衆のなかに彼は入る。またリスボンを走る一九世紀のイギリス製の市電に多少ともノスタルジックな感慨を込めて乗ったかと思うと、ポルトガルの田舎町にあるドイツ空軍の演習基地(NATOの現実!)の将校夫人と話す。ポルトガル人とのメンタリティーの差はまさに「非同時的なものの同時性」そのものだ。

彼は言う。「われわれの世界には多くの非同時性がある。等温線だとか等圧線といったものだけが、なぜいつも問題にされるのか? われわれが旅行しているとき、自分たちがどの時代領域を歩き廻っているのかを読みとることのできる線を見つけだすことのほうが、はるかにおもしろいではないか。きもとわたし、つまりわれわれが実際に一九八六年に生きていて……メクレンブルクの

ある小都市を訪れたと仮定するなら、そこでは手紙を、一九五八年の日付で書きたくなるかもしれない。アマゾン河流域の集落でなら一九三五年の日付を、ネパールの僧院でならナポレオン時代の日付を添えることもできるだろう」。

かつての栄光の時代への思いと現在の哀愁に沈むポルトガル。生き馬の目を抜くような中部ヨーロッパの合理的生活からはおよそかけ離れた生活。統計的にはとくに破産し、餓死者がいっぱい出ているはずなのに、みな結構なんとかやっている生活。それは伝統的な共同体が見えないところで生きており、「どこにも登記されていない菜園」があり、物々交換があるからであろう。そうした、ギブ・アンド・テイクの生活が機能していると、資本主義の中心部で現実法則とされているものの非現実性も見えてくる。遅れている方が進んでいるかも知れないのである。「なぜならかれらが、資本主義的合理性に對置するものは、無能力だけとは限らないからだ。それは抵抗でもある。この無能力と抵抗を区別することは、かなり困難だ」。資本主義の能率性への静かなサボタージュがここにはある。「かれらポルトガル人は独自のもの

のに固執する——かれらの病的な寛容に、奇跡にたいしてだけは尻ごみする懷疑に、いいかげんな気前のよさに、ひょっとしたらユートピア的かもしれないぬさまざまな美德に。……だが、もしかするとそれらはいつの日にか必要となるのでは？……理性批判は、この国民の内部で、すっかり身についたものとなった。政治が軍備と生産を越えるものだと仮定するなら、願望のヨーロッパが存在すると仮定するなら、このヨーロッパのなかでは、ポルトガルは断じて周辺部の添え物ではなく、ひとつの強国といえるのではなからうか」(訳文は一部の修正を除いて石黒英男氏のものを使用)。

むろん、やたらと周辺や差異の魅力と意義を中央に中欧にいた人間がもちあげるのほどおかしい。しかし、実際にこうした遅れがもたらす文化的アイデンティティと普遍的価値による統合とをどのように調整していくのかは、これからのヨーロッパの課題である。そして、よく考えてみれば、それはヨーロッパだけが直面している課題ではない。日本においても、明治以来の中央集権が曲がり角に來ている。また戦時中から経済成長まっしぐらの現代にまで続く事実上の国家総動員体制に疑念をさ

しはさむ声上がり始めている。価値の普遍性と個の差異性——その調節は、少数民族や小国家を多数抱えたヨーロッパにとつてだけでなく、同じくヨーロッパといふのは同じに異文化出身の大量の外国人と共存しなければならぬ日本人にとつても大きな問題となろう。

文献リスト

ヨーロッパ文明と日本（朝日選書一六） 桑原武夫 朝日新聞社 一九八四年

素顔のヨーロッパ（朝日選書一二二） 桑原武夫 朝日新聞社

一九八六年

ヨーロッパ人 L・バルジーニ／浅井泰範訳 みすず書房 一九八六年

ヨーロッパを考える E・モラン／林勝一訳 法政大学出版局

一九八八年

現代ヨーロッパ政治史（上・下） 山口定 福村出版 一九八二・八三年

ヨーロッパ小国の国際政治 百瀬宏編 東京大学出版会 一九九〇年

アウシュヴィッツは終らない——あるイタリア人生存者の考察（朝日選書一五一） プリーモ・レーヴィ／竹山博英訳 朝日新聞社 一九八七年

イタリア——美術・人・風土（朝日選書一八六） 三輪福松

朝日新聞社 一九八八年

新イタリア事情 上・下（朝日選書二二六・二二七） エン

ツォ・ピアージ／大西克寛、林要一訳 朝日新聞社 一九八三年

現代史ベルリン（朝日選書二四六） 永井清彦 朝日新聞社

一九八四年

ユダヤ人 上・下——神と歴史のはざま（朝日選書二六五・二六六） マックス・I・デイモン／藤本和子訳 朝日新聞社 一九八七年

イスラム・スペイン建築への旅——薄明の空間体験（朝日選書二七三） 栗田勇 朝日新聞社 一九八五年

シチリア、神々とマフィアの島（朝日選書二八八） 竹山博英

朝日新聞社 一九八六年

エロスと神と収容所——エティの日記（朝日選書二九八） エ

ティ・ヒレスム／大社淑子訳 朝日新聞社 一九八六年

近代絵画と北方ロマン主義の伝統——フリードリヒからロココ

へ ロバート・ローゼンブラム／神林恒道・出川哲郎訳 岩崎美術社 一九八八年

ART・MAP①・②パリ物語 上・下 隠岐由紀子他 世界

文化社 一九八八年

ART・MAP③・④ ロンドン物語 上・下 伊藤大介他

世界文化社 一九八八年

ART・MAP⑦ ベルギー物語・オランダ物語 高橋達史他

世界文化社 一九八八年

諸文明の対話——マルロー美術論研究 中田光雄 みすず書房

一九八六年

美術のヨーロッパ——美術館と遺跡をたずねて 金田民夫他

創元社 一九七九年

不屈のユダヤ魂——ヘブライ語の父、ベン・イエフダーの生涯

ロバート・セントジョン／島野信宏訳 ミトレス 一九八八年

年

音楽と市民革命 松田智夫 岩波書店 一九八六年

カタルーニャ讃歌 堀田善衛 新潮社 一九八四年

地中海文明物語 4 エトルリアの秘密 G・ボルドリーニ／

榊原晃三訳 ぎょうせい 一九八九年

古代のローマ水道——フロンティアヌスの『水道書』とその世

界 今井宏 原書房 一九八七年

洪水の前——ベルリンの一九二〇年代 オットー・フリードリ

ク／千葉雄一訳 新書館 一九八五年

危機に立つドイツ精神 E・R・クルツイウス／南大路振一訳

みすず書房 一九八七年

マニエリスム都市——シュトラスブルクの天文時計 三宅理一

平凡社 一九八八年

ヘレニズム文明 W・W・ターン／角田有智子・中井義明訳

思索社 一九八七年

民主主義——古代と現代 M・I・フィンレイ／柴田平三郎訳

刀水書房 一九九一年

ルネッサンス夜話——近代の黎明に生きた人々 高階秀爾 平

凡社 一九八八年

ルネッサンスの祝祭 上・下——王権と芸術 ロイ・ストロン

グ／星和彦訳 平凡社 一九八七年

ヨーロッパの政治「歴史政治学試論」 篠原一 東京大学出版

会 一九八六年

ヨーロッパの民衆文化 ビーター・パーク／中村賢二郎・谷泰

訳 人文書院 一九八九年

甦える中世ヨーロッパ 阿部謹也 日本エディタースクール

一九八七年

逆光の中の中世 阿部謹也 日本エディタースクール 一九八

六年

王の二つの身体 E・H・カントーロヴィッチ／小林公訳 平

凡社 一九九二年

ヨーロッパ文明史 フランソワ・キゾー／安土正夫訳 みすず

書房 一九八七年

ブローデル 歴史を語る——地中海・資本主義・フランス

フェルナン・ブローデル／福井憲彦・松本雅夫訳 新曜社

一九八七年

新しいヨーロッパ像の試み——中世における東欧と西欧 G・

バラクロウ編／木村尚三郎解説／宮島直機訳 刀水書房 一

九八七年

カタロニアへの眼——歴史・社会・文化 樺山紘一 刀水書房

一九八五年

ポーランド革命史研究 阪東宏 青木書店 一九六八年
 黄昏のウィーン——ハプスブルク王朝の終焉 須永朝彦 新書
 館 一九八六年
 青きドナウの乱痴気——ウィーン一八四八年 良知力 平凡社
 一九八六年
 ウィーン精神 1・2 W・V・ジョンストン/井上修一・岩
 切正介・林部圭一訳 みすず書房 一九八七年
 世紀末のヨーロッパ B・タックマン/大島かおり訳 筑摩書
 房 一九九〇年
 ザルツブルク 祝祭都市の光と影 池内紀 音楽之友社 一九
 八八年
 ハンガリー改革史 盛田常夫 日本評論社 一九九〇年
 フランス革命年代記 J・ゴデシヨ/瓜生洋一他訳 日本評論
 社 一九八九年
 スイス 歴史から現代へ(補訂版) 森田安一 刀水書房 一
 九八四年
 ベルリンの壁 崩壊——フォト・ドキュメント 一九八九年一
 月九日 アンナ・シュヴァルタウ他 三修社 一九九〇年
 舞台・ベルリン——あるドイツ日記 一九四五/四八 ルー
 ト・アンドレーアス/フリードリヒ/飯吉光夫訳 朝日イブ
 ニングニュース社 一九八六年
 ナチズムと大衆社会——民衆生活にみる順応と抵抗 村瀬興雄
 有斐閣 一九八七年
 ワイマール・エチュード ヘンリー・バクスター/蔭山宏・柴

田陽弘訳 みすず書房 一九八九年
 ワイマール文化とファシズム 蔭山宏 みすず書房 一九八六
 年
 ヨーロッパ人 ルイジ・バルジーニ/浅井泰範訳 みすず書房
 一九八七年
 十八世紀ヨーロッパ思想——モンテスキューからレッシングヘ
 ポール・アザール/小笠原弘親、小野紀明、川合清隆訳 行
 人社 一九八七年
 ヨーロッパ半島 エンツェンスベルガー/石黒英男他訳 晶文
 社 一九八九年
 ヨーロッパとは何か 饗庭孝男 小沢書店 一九九一年
 ひとつのヨーロッパいくつものヨーロッパ 宮島喬 東京大学
 出版会 一九九一年
 近代の哲学的ディスクールⅠ・Ⅱ ユルゲン・ハーバーマス/
 三島他訳 岩波書店 一九九〇年
 三島憲一(みしま・けんいち)
 一九四二年東京生まれ。一九六五年東京大学教養学部教養学科卒業。
 一九六八年東京大学大学院比較文学比較文化博士課程中退。千葉大学及
 び東京大学教養学部助教授を経て、一九八七年から一九九一年まで学習
 院大学文学部教授。一九九一年四月より大阪大学人間科学部教授(比較
 文明論講座担当)。当面の関心領域・近代社会論。現代ドイツ思想。異文
 化共存論。

新聞雑誌室から

カウンターで

『グリオ』という雑誌ありませんか、加藤周一代表の現代世界と文化の会という所が編集し平凡社から三号ぐらい出ているのだが……」。

朝のカウンターでこう尋ねられる。「加藤周一はこの図書館の本館である都立中央図書館の館長でもあります、申し訳ありませんが、まだはいっておりません」とまず答える。「栗田週報」などの創刊誌案内はファイルしているが、そこにもなかった。「雑誌新聞総カタログ」にはたしかに九一年四月発行になっている。書店にたのんで、取り寄せてみる。いつまで続くかなという不安はかすめるが、「こういう雑誌こそちゃんと購入すべきだ」と

都立日比谷図書館

石井敏子

というのが係員の一致した意見になる。

新聞雑誌室のカウンターはこのようにお客様から教えられることが多い。

「こういう者ですが」と警察手帳をみせ「こういう男がきたら教えてください」とカウンターで似顔絵を見せる刑事。全国の地方新聞に載った事件をネタにサギを働いた男を探しているのだが「その男は絶対にここにきています、全国の地方新聞が見られるのはここしかないんですよ」とのこと。国会図書館や都立中央図書館にもありますよというところ、「金の受渡しの場所は日比谷公園の中なんですよ。お宅に全国の地方紙があるから困るんですよ」。全国の地方新聞と全国の電話帳は犯罪にも便利

のだらう。

名前は有名だが

この十数年日比谷界限も様変わりして美しくなった。

その中で唯一「戦後」の面影を残しているのが、我が日比谷図書館である。一九〇八年（明治四一年）開設で日本の公共図書館のなかで一番古く、名前だけは有名だ。

「日経BP社に聞いたなら、その雑誌は、国会図書館と、日比谷図書館にあるでしょうと言われた、お宅にあるはずだ」という電話。日本を代表する図書館としては余りに貧弱だといって怒ってかえる人もいる。

一九五七年に出来た今の建物は、一九六一年に四階が

増築され、その当時は新しかった図書を手に取って見ら

れる開架式書架を採用した。主題別閲覧室として文学室や新聞雑誌室ができ、まさに日本の公共図書館を代表するものだった。その後地域の図書館の充実のなかで、一九七二年一〇月、当時の資料は全て都立中央図書館に移転した。参考調査と都内区市立図書館への協力援助などの機能はそちらに移り、日比谷図書館は、昼間人口の極端に多い霞が関の地で、その立地条件を生かし、都立中央図書館の貸出部門として再出発した。

入口でチェックすることもなく、道路とおなじに自由に入出入り出来るシステムのためか年間一〇〇万人が出入

草思社

緑の戦士たち

F.ヒアス／
平澤正夫訳

——世界環境保護運動の最前線

環境保護団体の活動を世界各地で取材し、その生の声を伝えることを通して「持続可能な開発」が可能かどうかを考える。定価2600円

日本占領下の ジャワ農村の変容

倉沢愛子

綿密な現地調査とオランダでの資料探索をもとに、日本統治の実態とその影響を明らかにした極めて貴重な研究成果。定価8800円

渋谷区神宮前4-26-26
電話 03 (3470) 6565

りしている。一〇〇万冊以上の資料を抱えた都立中央図書館は、むしろ図書館の図書館として地域の図書館に資料を提供することが仕事の中心になっているので、入館者に関しては日比谷図書館の半分、学生のデイトの場所として有名である。ここ日比谷図書館は、圧倒的に社会人が多い。七割以上を占めている。しかも、競馬場や、秋葉原の電気街にまさるとも劣らない男性が圧倒的に多い「教育文化施設」になっている。

一、一〇〇種の雑誌を開架

一九七三年五月日比谷図書館新聞雑誌室も、それまでの資料は全て都立中央図書館に移して新たに開架した。貸出が中心のはずだったが、人手がなく「館内閲覧のみ」で現在に至っている。今は、貸出していないから閉館近くまで待てば、絶対見られる所として、特徴にもなっている。

書籍情報社の『東京ブックマップ』によれば、次のように紹介されている。「新聞約一八〇種に加えて、雑誌が一、一〇〇種室内に開架されており、非常に使いやすくなっている。新聞の保存は一般紙、地方紙、専門紙など、それぞれ四カ月から一年、雑誌はだいたい三年間の保

存。週刊文春、週刊新潮、週刊ポスト、週刊室石、フォークスといった週刊誌類を見ても分かる通り、近辺に勤める会社員の利用の多いこともあって、他の公共図書館の雑誌コーナーに比べ、娯楽性の高いものも集められている。上記二室（国会、都立中央）に比べ、雑誌が開架されている点と、コピーにかかる時間が比較的短くてすむのが特徴」。

国会図書館の雑誌一〇、〇〇〇種、都立中央図書館の雑誌九、〇〇〇種には比べようもなく貧弱なのだが、やはり「日比谷」のネームバリューと、地下鉄五本、JRもという交通の便からか、新聞雑誌室は利用の多い部屋になっている。最近三年分ぐらいいごく一般的な雑誌が、自由に手に取って見られるのが、魅力になっているようである。

当然来館するのは、それこそ子どもからお年寄りまでだが、会社の仕事に使っている人が目立つ。最近では四月も混む。新人を連れてきて資料の使い方の研修や引き継ぎをやっている光景もみられる。土曜日には、お父さんが子ども連れでくる。キャリアママが赤ちゃんを低書架の上にのせて、英語と日本語の「ニュース・ウィーク」

を見比べている。

コンピュータで打ち出されたリストを持って現物をコピーに来る人、地方紙をめくりながら、特定の主題についての記事索引を作成する人など、常時仕事に使っている人々が最近非常に多くなっている。

使いやすくするために

裏方の側からいうと、使いやすくするためには目に見えない所で人手がかかっている。究極のレファレンスは、職員に何も聞かなくてもスムーズに資料にたどり着くように、掲示や、資料の配置に気を配ることではないかと思う。

書店から届く雑誌をその日のうちに書架に出すには、コンピュータで受入れチェックするより、従来のビジュアルカードにチェックするほうが早い。一八〇種の新聞を提供しようとすれば、毎日きちんと綴じなければならず、一カ月たてば合冊しなければならぬ。一、一〇〇種の雑誌を開架していれば、きちんと所定の位置に資料が返っているかどうかを絶えず点検していなければならぬ。カウンターでよくきかれる「こういうことについて、どの雑誌に載っているか判るようなリストあります

か」という声に応えて、「東京の地価と住宅」「高齢化社会」「外国人労働者問題」などの雑誌記事索引を、全員で室内の全資料に当たって作ることもあった。

建て替えの計画が

「ちょっとこの部屋の掲示について写真をとらせてください。この図書館は外観はきたないけど、内部はきれいに改装して、資料も見やすくなっていますね。それにあんまりお金を掛けないで、手作りで工夫しているのがいい」。ある区立図書館友の会の人たちがこう言ってくれた。ときどき公園管理部からなんとかならないかと苦情が出るほど、老朽化が激しい。外壁が崩れ落ちそうになったり、利用者用のエレベーターやエスカレーターもない。書庫も満杯、資料を開架するスペースもなくなっている。特に新聞雑誌はタイトル増やすにも、それが月刊か季刊か、厚さや大きさが問題になる程である。

昨年やっと日比谷図書館の改築が都の今後十年間の長期計画にのせられた。具体化には様々な努力が必要になるのだが、少なくとも改築の一つの中心に、新聞雑誌の充実があげられている。この二〇年間の日比谷図書館の

事業の伸びが、図書の貸出などは地域の図書館の充実のためか横ばいなのに、新聞雑誌のレファレンス、コピー利用などが急増した事に考慮してのことだ。図書館協議会の答申では「逐次刊行物センター」として、都立中央図書館の雑誌も集中するという計画だし、職員の日比谷図書館あり方検討委員会でも、新聞雑誌室は雑誌三、〇〇〇種、新聞三〇〇種と今の倍以上の規模にすることを提案している。出版社と協力して、毎年創刊される雑誌を全て一年は購入し展示するとか、図書の新刊書の展示コーナーを設ける等のアイデアも出されている。

お父さんたちの調べ物のために

東京の公共図書館は一九七〇年代美濃部知事の時代に、「東京都の公共図書館の振興のための課題と対策」を策定、これに基づき資料費、建設費の補助を行ったこともあり、大きな飛躍を遂げた。区市立図書館の都民一人当たりの貸出冊数は一九七〇年の〇・四冊から、一九九〇年には四冊と一〇倍になった。都立中央図書館はそのような区市立図書館をバックアップするため一九七三年に開館した。さらに多摩地区の市町村図書館へのバック

アップ機能を中心とする都立多摩図書館が一九八七年にでき、特に市立図書館との新聞雑誌の収集、保存、提供の協力がはじめて仕事として位置づけられた。

新日比谷図書館の新聞雑誌室では、区立図書館との協力の仕事も重要になるだろう。

これまでの貸出を中心にした地域図書館の利用の主役は子どもたちであり、母親たちだったように思う。今後は、週休二日制の進展の中で、働く父親たちが仕事や趣味に関する調べ物をする所としても、図書館の役割が重要になってくるのではないか。

現在の日比谷図書館はそんな今後の図書館を先取りしている様にも思われる。

二一世紀に向けて、さらに情報機器の発達は著しく、新聞雑誌という活字メディアの将来については想像出来ないものがあるが、いろいろな働く人々の共同の書斎として、使い易さと暖かさを失わない公共図書館として、なんとか改築したいとみんな考えている。

そのためにみなさまのお力添えをお願いします。

中小書店がいかにして“堅い本”を売るか

——「TS選書」三年間の試み

文化通信社
星野 渉

小書店が日頃扱いにくい“堅い本”を販売するため、本を書店間でローテーションさせることでリスクをなくそうという試み「TS選書」が、ことし三年目を迎えた。

東京の中野区、杉並区の一六書店でスタートした企画が、東京都書店商業組合青年部（柴崎繁会長）に引き継がれ、現在は中野、杉並、目黒、世田谷、江東、江戸川の各支部青年部員四八書店が参加するまでに成長した。まだ実験段階の域を出ない試みだが、“本屋のおやじ”が一冊の本を売ることへのこだわりを、いかに商売として成り立

たせるかを考えた試みであり、その意味で書店組合の事業という枠を越えた可能性をはらんでいるように思う。

「TS選書」のしくみ

一九八九年のスタート時に新聞やテレビでも取り上げられたためご存知の方も多いと思うが、この企画は信愛書店（東京・杉並区）の原田福夫氏が立案した。参加書店は同氏が支部青年部長を務める東京都書店商業組合中野・杉並支部の一六書店。中野・杉並ということから

「NS選書」と命名された。その後、東京組合に青年部が設立され、原田氏がその副会長に就任したという事情もあって組合青年部として取り上げることになる。名前も「TS」（東京組合青年部）と変更。いまは組合青年部にTS委員会を設置し、より多くの書店が参加できる仕組みの開発や参加出版社の出品リストを非参加書店に紹介するなど、より広く息の長い活動に取り組んでいる。

当初の「NS選書」の基本的な仕組みは、まず参加する一六書店が四書店ずつの四グループを作り、出版社四社で各社同一のセット（棚一段分・三五冊前後）を四セット組む。そして一社のセットを一グループの四書店に入れる。この状態で各書店は三カ月間販売し、三カ月後に次のグループに回すことで、参加した四グループの各書店は一二カ月で四社のセットを扱うことが出来る。

この期間、売れた本はそれぞれの書店が通常取り引きしている取次を通して補充。出版社は一二カ月長期委託の形でセットを出しているため、最後の書店が完全セットにして各出版社に返す。商品の流れは出版社から最初の書店に宅急便やAN便（学生援護会の配送ルート）を組合が利用した配便便）を使って直送、書店間の移動は同

一地域のため各書店で行い、最後の書店が出版社に直送する形にした。

また、このローテーション期間中に新たにスタートした「自然の会」六社（研成社、東海大学出版会、どうぶつ社、平河出版、平凡社、八坂書店）の場合、参加書店を二グループにし、各社の商品をA、Bの二セットに分けて各グループに半年委託条件で入れた。一書店がA、B両セットを三カ月間ずつ扱うというもの。最初の四社の選書は、出版社名をセットのテーマとし、六社のものは一つのテーマでくくっている。このように応用すること、出版社、書店の参加数、さらに選書の形や性格を変えることができるわけだ。

最初のローテーションに参加した書店は七坪の信愛書店をはじめ、いずれも四〇坪以下の小規模店。駅前あり住宅地ありと立地条件や客層もバラバラ、当然それまでの品揃えも経営に対する考え方も違い、人文・社会科学系の書籍で店作りをしてきた信愛書店のほかは、四版元の商品は一度も扱ったことがない、という書店がほとんど。一方出版社も初めての試みということで、信愛書店と取り引きのあった中堅人文書出版社四社（工作舎、青

土社、みずす書房、リポポート）が原田氏の呼びかけで集まった。

このときは各三カ月で一店平均回転率が三五%。店数と冊数の規模でみるなら微々たるものかもしれないが、いままで置いたこともない書店で、しかも棚一段入れただけの企画にしては上等以上の成果と言えよう。出版社の評価も「普段置いていないところに読者がいるとわかった」「中小書店でわが社のファンがつくのはありがたい」と取材したかぎりは良好だった。

ローテーションの発想

いわゆる「堅い本」といわれる専門性の強い書籍は、「条件が厳しい」「回転しにくい」といったことで書店に敬遠されがちになる。これは再販制度と少ない利幅のなかで、効率化によって経営を維持してきた中小書店の店頭にはつきりと現れている。たしかにこうした本は一冊一冊の単価が高いというメリットがあるが、それゆえにシヨタレ、万引きの危険負担も大きくなる。特に規模と量の効果を期待しにくい小規模書店では、こうした危険をできるだけ抑えたいと思うのは当然だ。

出版社側からみても、未知の中小書店においてそれは商品を出しにくい。売れるかどうかかわからず、そのうえきちんと扱ってくれるか不安があり、返品ともなれば期限切れ、汚損本といったトラブルが発生するかもしれない。売り切る保証なしに、そんな市場に手間をかけてセットを大量に出すことは難しい。また取次も、ただでさえ常備を切り詰めようとしているなかで、小口セットを点在する書店に簡単に出荷するとは思えない。ここで出版流通の歪みともいえる問題一つ一つには立ち入らないが、そのなかで、中小書店と専門・学術出版社のきずなが薄れつつあることは確かだろう。

「NS選書」の特徴は、こうした書店、出版社、取次が抱える危険負担を減らし、三者ともにメリットが得られるように「ローテーション」という方法を導入した点にある。すなわち、書店は一年長期委託の条件で四社のセットを扱うことが出来るうえに、組合事業という形で仕組みが保証されているためトラブルの不安が少ない。さらに、これまで繋がりのなかった出版社と面識ができ、あわせて読者発掘による今後の可能性が生まれる。出版社にとっては、商品に四回の販売機会が与えられ、

従来と違った販売チャンネルを発見でき、取次も実利のある補充だけを担当することになる。

このように三者が積極的な動機で参加できるようにしたことで、小規模で地道な企画がとりあえずここまで進んできた。それではなぜこうまでして一書店が「堅い本」を扱うことにこだわってきたのだろうか。立案者の原田氏は取材に対して読者からのクレーム「中小書店は金太郎飴」の解消を強調した。

ふらりと入ってきた客が「へーおもしろい本があるな」と思い、再び「あの書店ならなんか面白い本があるんじゃないか」と立ち寄ってくれる。そうした信頼が固定読者になる。原田氏は地域に密着した中小書店だからこそ、こうした読者の信頼が必要だというのだ。さらに、これぞと思って並べた本を、ある時この読者が手にし「この本探してたんですよ」などと恥ずかしげにいわれれば「書店をやってよかった」とつくづく感じる、という気持ちは書店人ならずともよくわかる。

しかし、それはあくまでも商売として成り立った上で感じる喜びであるべきだ。そのために原田氏はこれまで一切常備を入れず、自ら（現在は夫人が）神田村へ行き

一冊一冊手に取って仕入れてきた。それでも「真っ赤な血（赤字）を流しながら」の仕事であり、他の中小書店と話すことで多くの書店が同じ悩みを感じていることを知った。本来なら競争相手であるはずの近隣書店が商品を回すという「ローテーション方式」は、こうした状況を少しでも改善し、同じ悩みを持つ書店が店を創るきっかけを掴めるように、という気持ちから発想されたといえるだろう。

NSからTSに

組合青年部発足後は「TS選書」と名称を改め、まず「NS選書」のスタイルをほかの地域に広げることに着手した。書店間の移動を自力で行うため書店は組合の支部単位で参加、出版社は工作舎、青土社、筑摩書房、リポポートの四社が商品を出し、準備が整った支部から順次スタートした。

結果は九〇年十一月から一年間目黒区、世田谷区で実施した例をみると、四社合計の平均回転率は十一月ー一月が四五・四％、二月ー四月が四〇・〇％、五月ー七月が三五・五％、八月ー十月が三九・三％、期間中の出版

社ごとの平均販売冊数は一店あたりA社一四・六冊、B社一五・三冊、C社一二・四冊、D社七・六冊になった。これをどう評価するかは各社、各店の考え方によるだろうが、一年間ほぼ同レベルの回転率を維持していることは注目できる。

また、今年五月からは「TS首都圏フェア」「TSベースメント」という新しい企画がスタートしている。「首都圏フェア」は東京近郊の地方出版社一七社と地方・小出版流通センターで構成する「首都圏出版人懇話会」の図書を対象にした企画で、参加書店の支部という枠を外し、都内全域の一六書店が一度に参加する。このため書店間の移動距離が長くなり、初めて青年部予算で運賃の一部を負担することになった。一方「ベースメント」とは、その名の通り「ローテーション方式」と並ぶ「TS選書」の基盤として企画したもので、テーマに沿って出版社を募り、各社のセットを参加店ごとに発注するというもの。今回は地球サミットが近いこともあって、「自然の会」と「耕す本」の会の一五社が参加し、各社五―七冊のセットを返品条件付き三カ月延勘で出荷する。

青年部の事業となったことで、参加書店の幅が広が

り、こうした書店への取引面、資金面での援助の充実が図れるようになり、新たな企画の実験も始まった。もちろん組合事業となれば、逆に様々な制約も出てくる。現に参加書店を限定せざるを得ない「ローテーション方式」や、組合による資金援助に一部から疑問の声が出されたこともある。セットの輸送手段やその運賃負担など解決すべき問題も多いが、問題の多い出版界で特に苦境が伝えられる中小書店から、このような試みが始まったことの可能性は大きいものではないだろうか。

弘報委員会より

○五月八日に人文会総会・五月一六日から二五日までの「アメリカ研修旅行」と大きな行事が続いたため本誌の刊行が遅れてしまいました。お詫び申し上げます。

○次号において「アメリカ研修旅行」を特集いたします。お楽しみに。

○本誌が旧弘報委員会担当の最後の「人文会ニュース」となりました。多くの方々のお力添えをいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

九二年度委員会活動について

去る五月八日、年次総会を開催し、九一年度の活動報告および九二年度の新体制を決定いたしました。

まず、初めにご報告すべきことは、相田良雄氏がみず書房を退職されたのを機に小会の会長を勇退されました。人文会に多大の貢献をされましたこと、厚く御礼申し上げます。

新会員社として草思社の加入が承認されました。会員社数は、二十二社になります。前年度と比較いたしますと七社の担当者が交代いたしております（巻末の名簿をご覧ください）。九二年度は、新会員社として新担当者と新しづくめの年になりました。

なお、代表幹事に菊池明郎氏（筑摩書房）、書記に須田康昭氏（平凡社）、会計に平石修氏（御茶の水書房）を引き続き選出いたしました。次に、各委員会の新委員長に

今年度の活動予定を執筆していただきました。

販売企画委員会

委員長 重光義彦

内規により引き続き販売企画委員長に任ぜられました。この一年間各方面の皆様いろいろなお世話になりながら、何事も成すことの出来なかった自分を恥じ入るばかりです。

人文書ばかりか昨今は書籍を取り巻く状況そのものが厳しさを増しているようです。当委員会の『すぐれた人文書の普及・販売を積極的に推進する』活動目標の実行の為に私たちは地道な努力を積み重ねてまいります。皆

様がたのご助力をお願い申し上げます。

当委員会の新しいメンバーを紹介します。

委員長 重光義彦〔創元社〕 副委員長 武 一雄〔雄山閣出版〕 委員 古川 清〔青木書店〕 清水 博〔社会思想社〕 小林登美夫〔草思社〕

弘報委員会

委員長 原田敦雄

五月の定期総会で二年間委員長をつとめた土屋さん〔福村出版〕が任期満了をむかえるとともに弘報委員会メンバーであった西谷能英、辻村、佐久間の諸先輩が三人同時に人文会を卒業されたために差引きたった一人残った私がバトンを受けつぐこととなりました。

●今回の弘報委員会の構成は従来とは少し異り、二五周年を見すえてのイベント企画特殊部隊ともいえるメンバー三名をふくんでおります。このプロフェッショナルグループは濱地〔誠信書房〕、土屋〔福村出版〕、竹内〔東大出版会〕の各氏です。

このグループ以外に今までの当委員会の基本的活動を推進する任務として原田〔大月書店〕西谷〔未来社〕尼子〔紀伊國屋書店〕高橋〔有斐閣〕の四名が配属されました。

●今期の弘報委員会活動は三つの基本的活動——「人文会ニュース」の発行（年三〜四回、部数三、六〇〇部）②会員社の新刊リストをまとめ在庫チェック用に利用できる「新刊月報」の発行、③昨年スタートした「試読室」の発行——を引きつづき推進してゆきたいと思っています。

●当委員会の仕事は以上の様にやるべき事柄は決まっている点「やりやすい」ようにも見られますが、逆に日程消化に流されやすい傾向もあるようです。今回のメンバーには私以外は経験豊かな出版人で、人文会の大物ルークーキーです。外からみてきた視点を生かして一試合ずつ完投していただけるものと期待しています。

調査・研修委員会

委員長 阿部 昇

去る五月八日第二十五回人文会総会におきまして、新たに調査・研修委員長に任せられました。委員会構成は、氏家副委員長、萬洲委員、菅田委員であります。よろしく願ひいたします。

委員会活動の大きなものの一つに、特約書店を訪問することがあります。その時の研修会や懇談会を準備するのが当委員会です。

会員各社は、それぞれかなり積極的に書店、読者に対する働きかけをしている面もありますが、単独での行動はどうしても限界があり、難しい状況にあるため会員二十二社がまとまって効率よく訪問させていただくことを旨といたしております。

なお、本年度は関東近域の特約書店各位との交流不足等、懸案の事項についても出来る限り具体化させていきたいと考えております。

一口に人文書と云っても、その中味が多種多様であることは周知の通りであります。その多岐にわたる内容の人文書を、格別のご理解の下に卓越した販売対策を講ぜられ、その普及に専心し、今日を成し得ておりますことは、特約書店各位の長年にわたるご尽力の賜物であります。

本年は特約書店更新の年でもあります。今後人文書の普及につきましては一層のご理解とご支援を賜わりますようお願いいたします。

なお、本年の研修につきましては、既に去る五月十六日から二十五日まで非再販国アメリカを訪れ主要都市の書店を巡り、最後にロスアンゼルス近郊のアナハイムで開催された一大出版ビジネスショー、A B A（アメリカ書籍商協会）のブックフェアを視察し、書店、取次店、出版社間の熾烈な商戦を目の当りにして、日本の出版業界の常識とは異なる諸事例を見ることが出来ました。

最後になりましたが、業界全体を見渡しますと近年様々な動きや問題が認められますが、それらについても適確に見据えて然るべく対応をしていきたいと考えております。

図書館委員会

委員長 市川昭夫

人文会に、図書館とのコミュニケーションの強化を目的に、図書館委員会が設置されて、二年目となります。

この一年、図書館の視察見学はじめ、図書館の皆様との意見交換を実施して、図書館と出版社の相互理解を深めてまいりました。

一方では、実際に流通を担当されております書店、取次店の皆様との懇談をとおして、図書納入やシステムについても学んでまいりました。

本年は、前年の活動をさらに発展、相互にプラスとなるような充実した活動を目指したいと思っております。

前年は日頃、図書館にたいする、情報の内容について模索してまいりましたが、そのひとつとして、歴史書懇話会と「BOOK・LIST 199」を発行いたしました。三つ

の図書館用マークを並記した、はじめての年間刊行リストとして、大変好評を博しました。今年も当リストの継続発行を予定しております。整理された内容で、図書館に利用しやすい情報ツールとして、充実させる所存です。

なお、情報の提供にとどまることなく、この刊行図書を直接図書館の皆様方に、ご覧いただけることが理想であるとも考えております。一九九一年の新刊点数は約四万点といわれております。一方、人文書はじめ、専門書など、一点が少数数の出版はますます厳しさをまし、永く読者の要求に応えるという、文化的使命にも応えづらくなっております。この状況のなかで、図書館と密接の関係をたもち、読者の要望に応えることが重要で、一層図書館の使命に大きな期待をよせずにはおられません。

本年も、主旨をご理解をいただき、図書館はじめ、書店、取次店の皆様方の一層のご協力をお願い申し上げます。

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1992. 7. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
幹 事	青 木 書 店	古川 清	162	新宿区早稲田鶴巻町 538	3202-3999	3204-1187
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店	尼子 英二	156	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社 会 思 想 社	清水 博	113	文京区本郷 3-25-13		
幹 事	中銀本郷 3 丁目ビル				3813-8105	3813-9061
	春 秋 社	神田 治	101	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	3269-1051	3269-1092
	草 思 社	小林登美夫	150	渋谷区神宮前 4 -26-26	3470-6565	3470-2640
代表幹事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
幹 事	東京大学構内				3811-8814	3812-6958
	日 本 評 論 社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	3987-8621	3987-8590
	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	3813-3981	3818-2786
	平 凡 社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 Kビル	3265-0455	3263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
	法政大学構内				3237-1731	3237-8899
幹 事	み す ず 書 房	福田 晴行	113	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	未 來 社	西谷 雅英	112	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有 斐 閣	高橋 睦美	101	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会 ◎重光 ○武 古川 清水 小林

弘 報 委 員 会 ◎原田 ○西谷 尼子 濱地 竹内 土屋 高橋

調査・研修委員会 ◎阿部 ○氏家 萬洲 菅田

図 書 館 委 員 会 ◎市川 ○福田 神田

EC 欧州統合の現在

金丸輝男編者

欧州の没落を契機に、現存する国家を平和裡に統合するという壮大な実験を押し進めつつある欧州共同体EC。その歴史的背景、成立過程、機構、経済・農業・エネルギー・雇用等の政策、対外関係、政治的課題など、多面的に把握する。

A5判 2800円

創元社

大阪市北区西天満1-4-2
東京都新宿区山吹町334-11

グッド・マネー

〈資本主義は倫理的でありうるか〉 R・ローリー 平野秀秋訳 企業の社会的責任とは？ 公正にお金を増やすには？ 豊富な実践例に基づく、これからの経済活動に欠かせない指針。 2300円

メタロン 情報の天使

S・ユーリック 上野俊哉訳 コンピュータは電子魔術か？ ユダヤ神秘主義からバブル経済まで。驚異の思考で人類の文化的営為を読み直す、メガロマニアックな情報論。 2800円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話(3255)4501

エジソンに消された男

C・ローレンス 鈴木圭介訳 発明家ル・ブランズの謎の失踪。彼の映画発明の行方は？ 2900円

記録・天皇の死

栗原彬・杉山光信・吉見俊哉編 へ天皇の死という歴史の裂け目から日本をみる。 3600円

資本主義のシステム間競争

今井賢一 市場と組織が相互浸透しながら経済を進化させていくプロセスを探る。 1800円

筑摩書房

〒111 台東区蔵前2-6-4
☎03(5687)2680(価格は税込)

イタリアの旅から

科学者による美術紀行

多田富雄著 毎年イタリアを定期的に訪れる国際的な免疫学者が、建築、絵画、彫刻を通して、知られざる西欧精神の影の部分に迫る。 2600円

異文化とつき合うための心理学

金沢吉展著 心理学の成果と著者の豊富な経験を織りまぜ、国際人の条件や文化について語る。 1900円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666

宗教の混沌をみつめて
脇本平也・柳川啓一編

各価二六六円(税込)

現代宗教学

《全4巻》

1 宗教体験への接近

I 宗教体験との距離 井上順孝／中牧弘允／小林正佳

II 宗教体験の概念化 金井新二／深澤英隆／J・A・キプルツ

III 宗教体験の深層心理 久保田圭伍／河東 仁

2 宗教思想と言葉

3 祀りへのまなざし

4 権威の構築と破壊

6月刊

7月刊

10月刊

9月刊

東京大学出版会

発達心理学 ハンドブック

編集 東洋・繁多進・田島信元

Handbook
of
Developmental
Psychology

発達心理学の過去三〇年余りの成果を集成し、総合的・体系的研究の指針を示す画期的ハンドブック、遂に完成。
A5判・上製・函入／定価二〇〇〇円

東京・文京 福村出版 電話 (03) 3813-3981
小石川1-3 *定価は税込*

子どもがすすんで学習するようになる らくだ式学習法

主婦が出会った人押しつけない学習法の秘訣
間瀬中子／著・平井雪太／協力

1500円

◎ニューヨーク・福建・日本を結ぶ地下ルート

チャイナ・ 健達に国境などない。華僑社
会を仕切っている幫(バン)。

コネクション 中国人の人脉・金
脈・血脈がいま、
森田靖郎／著「好評発売中」1800円 世界を席捲する。

日本評論社

豊島区南大塚3-10-10 ☎3987-8621

中世思想原典集成

〔全20巻〕

編訳・監修 上智大学中世思想研究所

6 カロリング・ルネサンス

監修 大谷啓治 古典古代と教父時代の遺産を受け
継ぎ、自立へと向かう若きヨーロッパの清新な思
想的営為の全貌。
◎定価5,800円(税込)

王の二つの身体

中世政治神学研究

E・H・カントローヴィチ／訳 小林 公 最も浩瀚
かつ尖鋭な王権の解剖学。◎定価7,500円(税込)

平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5
番 電話 東京8-29639 / ☎03-3265-0455

法政大学出版局

絹

I・II

伊藤 智夫 著
もの・人間の文化史
各二四七二円

第I巻 養蚕の起源を神話や説話に探り、伝来の時期とルートを跡づけ、王侯貴族から武家・庶民まで、記紀・万葉の時代から近世まで、各時代が生んだ絹の文化を描く

第II巻 生糸と絹織物の生産と輸出が、わが国の近代化にはたした役割を描くとともに、養蚕の道具、養蚕と絹の民俗から蚕の種類と生態、さらには飼育の方法におよぶ

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1
☎03-3237-1731 振替・東京6-95814

鈴木和成著

境界の思考

ジャベス・デリダ・ランボー

定価3605円(本体3500円 税105円)

福島新吾著

日本の政治指導と課題

定価7725円(本体7500円 税225円)

未来社

東京都文京区小石川3-7-2
電話(03) 3814 5521 〒112

冗談

すべては「冗談」から始まった！
中央ヨーロッパが生んだ20世紀文学の傑作！

ミラン・クンデラ

主人公の「冗談」が生んだ波紋を追って織り成される錯綜した世界。男と女の悲喜劇を主軸にチェコの歴史を内面から描く。いま注目作家の最高傑作。

関根・中村訳 定価六六円 6月20日刊

暗き天才 メイエルホルト

エーリッヒ 廣清の嵐に消えた20世紀演劇の永久革命者の悲劇的像を、同時代人の眼で描く。図版47。青山太郎訳 哭室円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

◎江戸時代三百年を各巻900点の図版で再現

ヴィジュアル 江戸事情 全6巻

NHKデータ情報部編 監修＝樋口清之

◆第3回配本中 ③政治社会編

(大石慎三郎) 定価各3800円

●構成＝①生活編(石川松太郎・宮田登・坂本要)

②産業編(遠藤元男) ④文化編(芳賀登) ⑤建築

編(平井聖) ⑥服飾編(丹野郁・北村哲郎)

江戸時代 武士の生活

進士慶幹編 武士の公私生活を身分制度、職制、華公等多角的に追求した名著。 定価2500円

日本村落史講座 ①総論

木村礎他編 村落史研究全般について関連諸学との関係、諸外国の動向も合わせ解説。定価5000円

須恵器窯跡の分布と変遷

中村 浩著 須恵器窯跡の分布・構造と変遷などにつき、全国的視野のもとに考察。 定価3200円

雄山閣

*価格は税込

千代田区富士見2/振替東京3-1685

戦後思想の旅から

内山 節著 戦後思想の大きな転換期に
立つて、時代とともに変遷してきたその
歩みを辿り、自己の体験を織り込みつつ
綴る。時代精神を浮き彫りにする好エッ
セイ。四六判上製カバー付 定価一八五四円

東ヨーロッパ 人と文化と社会

石川晃弘著
政治・経済・社会のあらゆる面で変貌しつ
つある東欧の国々―その真の姿を活写
した好著。(有斐閣選書) 定価一五四五円

《森林社会学》 宣言

●森と社会の共生を求めて●
内山 節編 四六判カバー付 定価1648円
(定価はすべて税込みです。)
東京・神田 有斐閣 03/3265
神保町 -6811

●新しいアジアが見えてくる

アジアの人びと を知る本 [全5冊]

アジアで生きてい
る人びとの生活、
日本の進出によっ
てひきおこされて
いるさまざまな問
題を明らかにする

46判カバー
各巻1800円

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651<代表>

ジミー・ブレスリン◎著

ニューヨーク コラムシャワー

●ジミー・ブレスリンの世界●

ビート・ハミルが「アメリカン・ジャ
ーナリズムの巨人」と絶賛。ピュー
リッツ賞受賞の名コラムニスト、
ジミー・ブレスリンの初公開傑作コ
ラム集! 沢田 博◎訳 ¥1648・税込

ビート・ハミル◎著

アメリカン・ジャーナル

病める国アメリカへ、ジャーナリス
ト、ビート・ハミルが送る熱いメッ
セージ! 高見 浩◎訳 ¥1442・税込

青木書店

東京都新宿区早稲田鶴巻町538〔〒162〕
電話(03)3202-3999 FAX(03)3204-1187

●マスメディア論の陥穽を解く最新評論

時刻表の クリティーク

塩見鮮一郎〔著〕

A5変・230頁・定価2472円

時刻表・電話帳・住宅情報誌・アルバイト情報誌な
どをマスメディアとして改めて読み解き、表現の問
題を日常のニーズに置き直した画期的な力作!!

御茶の水書房

〒113 東京都文京区本郷5-30-20
☎03(5684)0751/振替東京8-14774

非
売
品

1992年7月20日発行 年4回発行 第64号

発行所 人文会 筑摩書房内

〒111 東京都台東区蔵前2-6-4

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印